

美術の窓(129)

奈良名所絵図の景観年代と制作事情

大和文華館館長 浅野秀剛

この春、兼務するあべのハルカス美術館が開館した。開館記念展は「東大寺」である。展示品の大半は、東大寺からお借りしたものであるが、一部、近鉄が所有する絵図も出した。その中に、「南都名所絵図」と「ならめいしよゑづ」があった。展示品を選択したのは私ではないが、その2枚の絵図が気に入り、少し調べてみた。その結果を、連載している地域情報誌『なら』5月号の「大和と浮世絵」欄に書いたが、意を尽すことができなかったので再述してみたい。

その2枚は、江戸時代に、奈良で売られていた絵図である。南都観光一日コースといったもので、旅籠屋などにも置かれていたのかもしれない。制作者の名はないが、版元の名はあり、「南都名所絵図」には右下に「陰陽町山村板」、「ならめいしよゑづ」には左下枠外に「なら大仏ゑづ屋庄八はん」と記されている。この2図を比べて見ると、よく似ていて、明らかに一方が他方を真似たものと分かる。しかし、これらが何時頃出されたものかを突き止めるのは大変難しい。

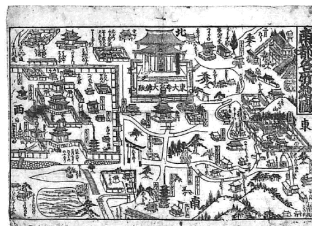
2図とも、東大寺の大仏殿と廻廊が具わっている。大仏殿の落慶供養が行われた宝永6年(1709)、そして大仏殿廻廊が整備された元文3年(1738)以降の景観であるが、享保2年(1717)に焼失したはずの興福寺の伽藍も、焼失前の姿で描かれている。興福寺の伽藍が元の姿になることはなかったので、描かれている景観は、構想による幻の景観ということになる。東大寺の大仏の開眼供養が行われた元禄5年(1692)以降、大仏殿再建の気運が高まり、大仏に引き

かるからである。おそらく山村重三郎が初代で、左門と和泉はその子孫という関係であろう。対する絵図屋庄八は、明和6年(1669)刊『大和名所記』に井筒屋庄八とあるのが最も早く、絵図屋庄八という表記は、安永3年(1774)刊『南都名所記』が最初である。ご子孫は今でも東大寺門前にあり、その系図によると、初代は寛保(1741~44)年間に絵図を売り初め、安永8年に六十一歳で没したという。そうすると、「ならめいしよゑづ」に記された「大和名所記」は、明和6年刊の『大和名所記』と考えるのが自然ということになる。絵図屋庄八という表記にこだわれば、「ならめいしよゑづ」の制作は初代の晩年の安永期であった可能性が大きい。したがって、「南都名所絵図」が先ということになるが、それが直ちに、「ならめいしよゑづ」の基が「南都名所絵図」ということにはならない。

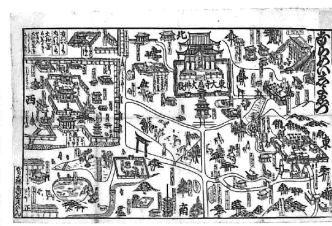
この2図とそっくりな絵図が、もう2種あるからである。一つは、元禄5年頃に作られた「南都名所之絵図」、もう一図は刊年不明の「ならめいしよゑづ」である。2図とも版元名は記されていない。「南都名所之絵図」は、大仏は描かれているものの、大仏殿は仮屋で、「元禄五年迄九百四十二年」と記されているので、大仏の開眼供養が行われた元禄5年に制作されたと考えてよい。「なら

めいしよゑづ」は、「南都名所絵図」「ならめいしよゑづ」とほとんど同一の図様であるが、細部の類似、題名の表記の類似、そして画中に「ならめいしよきうせきは、ならめいしよきにかきしるしあり」とあることなどから、「ならめいしよゑづ」の直接の祖本と考えられる。「南都名所絵図」は「ならめいしよゑづ」よりは早いように思われるが、厳密には分からない。明白なのは、それらの諸図が、元禄5年の「南都名所之絵図」系の絵図を基にしているということである。

現時点で、奈良名所絵図の制作事情をまとめると以下になる。元禄期の「南都名所之絵図」系の絵図を基に18世紀前期に「南都名所絵図」が制作された。それが山村重三郎なのか山村に先行する版元なのかは分からない。同じ頃か少し後に、「ならめいしよゑづ」が作られた。それが「南都名所之絵図」系の絵図を基にしたのか、「南都名所絵図」を基にしたのかは分からない。そして、「ならめいしよゑづ」を基に18世紀中期に「ならめいしよゑづ」が制作された。少なくとも18世紀後期に、「南都名所絵図」と「ならめいしよゑづ」が共存して販売されたのは確実なので、その時点で版權の問題は解決されていたのであろう。19世紀に入ると山村は営業を停止し、絵図屋は明治まで「ならめいしよゑづ」を販売し続けたのである。



「南都名所絵図」
(27.0×37.4cm、近畿日本鉄道蔵)



「ならめいしよゑづ」
(28.0×43.5cm、近畿日本鉄道蔵)

季刊 美のたより No.187

平成26年7月15日

発行 大和文華館